

# 「テンネ」排斥論

岡田蝶花形

私が柳の「古葛籠ンナ」を排斥したことに始まり、それが導火線となつて、御殿の「子は孝行に面やせてンネ」を排斥する人が出て來たり、野崎の「久松がンナ」などは不都合だと、態々これを唄はない人が出て來た。そればかりではなしに、菅四の「出てくるワンナ」同じく「乾鮭ランノ」太十の「藪垣ランノ」彦九の「尺八ランノ」中將姫の「時人を待たざればンナ」皆同じもので、その他かゝるものを搜したらいくらかあるか判らない、それ等を全部排斥しやうと云ふのである。假りに之をテンネ排斥論と名づ

けて置く。然し本意は「ンネ」排斥論である。幸ひ本誌の讀者あたりの有識階級から讀んで戴き且つ御批評を受ければ有難いことで、この事は東京の淨瑠璃時報と云ふ専門紙に私が書きかけたのであるが、丁度その時その表題を「日本語を知れ」と書いた爲めに、相當反感を持つ人が出て來て、近江清華、桑原美峰など云ふ人々は、多分師匠相傳の「古葛籠ンナ」の保存論者であつたらしく、それは忠四の「花籠」と同じく、それを「はなかなナアゴヲイヲイ」と云ふのと同じと、「ンナ」を産み字だと勘

違ひして論戰を張り、もう此の上は御答をしな  
いなどと逃げ腰を張つて、悪く云へば火事を見  
て騒ぎ出す野次馬に類してゐる態度故、私もあ  
きれて再びその論を續ける勇氣がなかつたが、  
未知ではあるが武智君から、非常に意義のある  
主唱だと云つて、願くばその理論を體系立て、  
願ひ度いと云ふ御手紙であつたが、私は音楽家  
でも文學家でもなく、醫者の義太夫好きと云ふ  
のに止るので、そんな難かしいことは書けない。  
只私が主觀的に、それが嫌ひであると云ふに止  
るので、こんなことは傳統的に此の如に育つた  
人々にとつては、これをやらなければ納まらな  
いもので、理窟は抜きで一つの麻酔に陥つて居  
るやうなものである。丁度酒を飲む人はどうし  
ても飲まずには居られないが、禁酒論者の私は、  
どうしても飲まないと云ふのと同じで此の點は

理論はどうでも、又今後どんなえらい人が出て  
來て、やらなくてはならないと理論付けられて  
も、私はやらないと排斥するだけの話である。  
既に去る四月八日、文樂の樂屋で綱造師が私に、  
「古葛籠ンナ」「釣をまへンネ」「蔦紅葉ンニ」等  
はどうしてもそれを云はないと三味線が弾けな  
いと、醫者の方で云ふ臨牀講義の患者の替りに、  
三絃を用ひて「ンナ」「ンネ」を抜いて三味線  
が戸惑ひする格好をやつて見せた。つまり大教  
授が親切に講義して呉れたのであるが、然もそ  
の晩、私は豊澤團秀と云ふ女義の絃で柳を公開  
の席で語つたが、立派に抜いて何等三絃が戸迷  
ひすることもなかつたし、又聽衆たる廣助師始  
め大阪の素義の錚々たる方々に聽いて貰つて少  
しも聽きづらくなかつた、と云ふ實例があるの  
である。

私事はその位にして、扱、柳の「古葛籠ンナ」に就ては岡鬼太郎氏の義太夫秘訣（明治末期の出版）は單に「糸訛り」と云つてゐるが、これは斯道で云ふ咲太夫訛りで、最も愚劣なもの、一つである。三代目咲太夫は相當な太夫であつたが、長く息が續かなかつたため、聲一杯に持つて行くべき處を持てず、「出て来るワンナ」とか「藪がきランノ」とか乃至は「エンネ」「テンネ」などと云つて誤魔化したものだ。それをも一派の師匠の如き太夫が一時粹文句（？）とでも誤解したのか、床で臆面もなく盛んに「ランナ」とか「ワンノ」とか「エンネ」とか愚にもつかぬことを振り廻し、又これを譯分らずの連中に教へたものではないかと察する。

又「ランナ」は産み字ではない。斯道で云ふ産み字は、語法上の子音で、我が國にては、從

來、母音（又は母韻）は、五十音圖の「ア、イ、ウ、エ、オ」の五音を云ひ、子音（又は子韻）は、カ行以下の各行の諸音で、これを發聲と云ふが、それを斯道の者——義太夫、若太夫以後の發聲の正しからざるものが、無暗に子音を連發し、曲節を技巧化すべく勝手に産み字の多くを創造したものである。尤も淨瑠璃は俗曲であるが、俗曲であるが故に、さう無暗に産み字や引き字を連發すべきものでない。今日斯道の研究は餘程進歩し、如何にすればこれを傳承し、踏襲して現在語られてゐる義太夫は多分に文章の味を減殺したものであるから、斯道の創始時代に還元し誤られたる傳承を正すべきかが聲樂上の第一義で、これやがて斯道に對する我々の義務であると云ふ點に進んで來てゐる。

ある一派が「ンナ」「ンネ」等を入れないと

三味線が弾けない、即ち語呂が合はないと云ふのは、一例を挙げると「古葛籠」では五文字であるが「古葛籠ンナ」とすれば七文字である、それでその處にもう二字を入れて七文字にする爲めにそうするのであると云ふ考へであるとすれば、義太夫は絃の爲めに出来てゐるものになつて了ふ。然も若し「テ」の下に「ンニ」を入れて「天に」とすれば、まるで他の不可解な意味になる。即ち「子は孝行に面瘦せ天にはぐくみ返す」となるが、之れをきいて何の意味であるかと思つた師範學校の生徒がある。態々こんなまぎららしい事をしなくともよい。

要するに斯くの如きは、口傳奥儀や作曲者の技巧(若し技巧とすれば愚も亦甚しい、この事に依つて全段の打ち毀しなり)に依るものでなく、又文法にも依るものでない事は常識を以て判断

すべしだ。私は斯界に「古つゞランナ」を産み字と云ふ半可通がある故に、「日本語を知れ」と云つたのだつた。

以上で大體の趣意が解つて戴けたら、今やかかることは、斯道で最も忌むべく、今更かゝる事を口にするすら恥とするやうになつて來て、之を墨守するのは舊い師匠だけであらうと思ふし、今更私どもがかゝることを云ふにも當らないが、然らばこれ等を抜いてどう語つたらよいかと云ふ事は結論である。それを述べて本稿を終らう。

即ち「ランナ」又は「ワンナ」などは殊更云はずとも「古葛籠」で一杯に語り「ランナ」又は「ワンナ」の間を、前の響音でやり、こゝで息を詰めて絃の間を待てばよい。(終)